屋根裏の「バベルの塔」

ネルヴァルの放浪・蒐集・夢

朝比奈 美知子

旧約聖書創世記に語られるバビロニアとバベルの塔は、十九世紀のパリの詩学において特別な位置を占めている。ピエール・シトロン著『フランス文学におけるパリの詩学』によれば、他の都市の比喩を用いてパリを語るという現象が顕著になるのはロマン主義期であり、この時期には、文学的イメージが定着した古代都市、ことに聖書からの引用が頻繁になるが、中でも、バビロニア（あるいはバベルの塔）の引用頻度は群を抜いて高いという[1]。この現象は、ロマン主義期におけるパリの都市神話の隆盛と密接に関わるものであると考えられよう。『ノートル＝ダム・ド・パリ』で大聖堂をバベルの塔に譬えたユゴーにとって、バベルの塔は、何よりも「建築物」としての都市の象徴であった。が、神話的都市像の作り手であるユゴー自身、パリの中心に聳える大聖堂を深い執着をこめて描きながら、すでに近代の都市空間において「建築物の死」が、物質的な意味においても精神的な意味においても後戻りのできない形で進行していることを認識していた。語源は Bāb-ili（＝天の門）であるとも bālal （＝乱れ）であるとも言われ、天に達する塔の建造の夢と神の懲罰としての言葉の攪乱の二重の意味を孕むバベルは、近代都市パリの象徴として引かれる場合にも、つねにこの重層的な意味を孕んでいるように思われる。

ところでネルヴァルの『オーレリア』には、一風変わった「バベルの塔」が現れる。

> 私の蔵書、ピコ・デッラ・ミランドーラ、賢人ムールシウスやニコラウス・クザーヌスの亡霊がよろこびそうな歴史、紀行、宗教、カバラ、占星学などあらゆる時代の学問の奇妙な集積、―― 二百冊よりなるバベルの塔 ―― これらす

[1] Pierre Citron, *La poésie de Paris dans la littérature française de Rousseau à Baudelaire* (2 vols), Paris Musées, 2006 (Réimpression de l'édition parue aux Éditions de Minuit, 1961), t. 2, p. 112-113.

べてが手元に残されたのだった。それには賢人を狂人とするに足るものがあった。（*III* 743[2]）

ここにおける「バベルの塔」とは書物の集積であり、一見したところでは「建築物」とは異質のもののように見える。その書物は、主人公「私」が、狂気の発作で収容されることになった精神病院の一室に集めたものである。「私」は「狭い屋根裏部屋」に「みずからのさまざまな財産の残骸」を集め、「ファウスト博士の家のがらくたの山を思わせるような」「奇妙な総体」を作り出し、それをみずからの「放浪の人生の縮図」と称している（*III* 742）。「バベルの塔」をなす書物はそうした蒐集品の一部をなしているのである。じつはネルヴァルは『東方旅行』においても、遊歩者（フラヌール）である自身を「蒐集家あるいは考古学者あるいは詩人」（*II* 182）と呼んで、遊歩者（フラヌール）の想像力と蒐集が密接な関係にあることを示唆しているが、パリに出現するこの「バベルの塔」、「賢人を狂人とするに足る」書物の集積は、ネルヴァルの放浪の想像力においていかなる位置を占めるものであろうか。

この屋根裏の「バベルの塔」は、ネルヴァルにおいて繰り返して言及される書物探索の放浪と深く結びついている。周知のとおり、『塩密売人たち』（およびそれが再構成されて編まれる『粋な放浪生活』、『アンジェリック』）においては、見出しえない書物の探索が中心的なテーマとなっている。主人公「私」は、旅先のフランクフルトのある広場で『ド・ビュコワ神父の物語』と題する一冊の書物に目をとめるが、パリでも容易に入手できると考えて購入を見送る。ところがパリで「私」を待っていたのは、「名状しがたい恐怖状態」であった。すなわち、新聞に小説を掲載する際に行数に応じて税金を徴収するという反動的なリアンセの新聞法改正案が施行され、小説家の創作活動そのものが阻まれかねない事態が生じていたのであり、それを端緒にして見出しえない書物を求めての「私」の受難の探索行が始まるのである。

この探索行は、まずはひとつの時代風刺として読むことができる。「私」は件の書物を求めてまず国立図書館を訪れるが、そこではそれが「小説」に「分類」されているらしいことが探索の障害となる。「このうえもなく親切な心づかいがみなぎって」いるにもかかわらず「新聞小説家や小説家が現れると、≪書架の内部が震え上がる≫」（*II* 10）という国立図書館は、まさに、

---

[2] ネルヴァルの作品の引用は、Nerval, *Œuvres complètes*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 3 vols, 1984-1993 より行い、巻数とページ数を略号にて記す。

リアンセ新聞法による思想統制の下で検閲に振り回されるフランス社会の縮図として、皮肉とペーソスを交えて描かれている。

他方、この探索の物語の途上において、語り手「私」は古代アレクサンドリアの図書館についての次のような示唆的な言及をしている。

> アレクサンドリアの図書館は、学者たち、もしくは、何か意義のある作品を書いて名を知られた詩人たちにしか入館が許されていなかった… そのかわり来館者への応対は完璧で、書物を調べにきた者は好きなだけ滞在し、その間無料の宿泊施設と食事を提供された。［中略］アレクサンドリアの図書館とその一部をなしていた救護院（ナラ＝イオン）は、四世紀にキリスト教徒によって燃やされ、破壊された。（*II* 9）

この古代の図書館の焼失の挿話は、これから展開する探索における「私」の受難を暗示している。十九世紀の図書館を経めぐる「私」は、古代に存在していた理想的な書物探索の空間がみずからの時代においては望みえないものであることを否応なく知らされることになる。

十九世紀の図書館は、もはや選ばれた者の場所ではない。国立図書館では、司書たちの労力の大部分が、「どこの読書室にでも転がっていそうなありふれた本を一日六百人もの読者に提供するために費やされ」、「閲覧者の名前も聞かないルーズなシステムのおかげで本の消失がおこっている」（*II* 8）。つまり図書館は、学者や「詩人」を犠牲にしても大衆に奉仕する空間となっているのである。「私」を介したネルヴァルの慨嘆には、ポール・ベニシューがバルザックの表現を借りて[3]「幻滅派」と呼んだいわゆる小ロマン派の作家たち、すなわちノディエやゴーチエに共通の感覚を見出すことができる[4]。

一方、ダニエル・サンシュが『異端のレシ』において示したように、見出しえない書物の探索は、ネルヴァルにおける自己探求と創作の不可能性の象徴となっている[5]。まず、「私」がパリに帰って経めぐった図書館は、国立図書館をはじめ「どこもかしこも休館」（*II* 17）である。この閉鎖状態は、す

---

[3] この表現は、バルザックの « Lettres sur Paris » (1831) から借りたもの。Voir Paul Bénichou, *L'École du désenchantement*, Gallimard, « NRF », 1992, p. 8.

[4] たとえばノディエの『ボヘミア王とその七つの城の物語』、ゴーチエ『青年フランス』においては、資本主義の台頭と文化の大衆化が進む社会における作家・詩人の強い疎外感が語られる。ネルヴァルの放浪の物語においてはとくに『ボヘミア王とその七つの城の物語』の影響が顕著に認められる。

[5] Daniel Sangsue, *Le livre excentrique*, José Corti, 1985, p. 349-406.

でに「私」の探索の失敗を暗示しているが、そこにおいては、「カタログ」、「分類」が重要なモチーフとなっている。

「私」がパリで最初に訪れる国立図書館では、求める書物が「小説」に「分類」されていたことが探索の障害となっていたが、続いて訪れたマザリーヌ図書館においても、「私」は「分類」が引き起こす深刻かつ滑稽な不条理に遭遇する。そこには「きわめて緻密なカタログがある」（*II* 17）のにもかかわらず、「私」は求める書物にはめぐり逢えない。なぜなら、問題の書物は、サン＝ジェルマン・デ・プレ僧院からきた所蔵図書に含まれており、「まだ分類されておらず、地下室に置かれて」（*II* 18）いるからである。件の書物は、あたかも「カタログ」による「分類」を逃れようとするかのように、他の書物に混じって乱雑に積まれたまま地下室に眠っているのだ。

探索者「私」の疎外はさらに続く。図書館を見切った「私」は古本屋に足を運び、求める書物の売り立ての情報を得るものの、ひとたび「カタログ」に「掘り出し物」として載った書物は、売り立てに先んじて売ることが許されない（*II* 21）うえに、売り立ては延期されることになる。「私」の探索においてはつねに「分類」が障害となるのだ。

一方、国立図書館での以下の挿話は、「分類」が孕む別の局面を示唆する。

> 突然ある図書館員が叫んだ。「オランダ語のがありますよ！」彼は私にその題名を読んで聞かせた。「ジャック・ド・ビュコワ ——『注目すべきできごと…』」
> 「すみませんが」私は指摘した。「私が探している本の題名のはじまりは、『世にも稀なできごと…』」というのですけどね…」
> 「いや、調べてみましょう、翻訳の誤りということもありますからね。
> ［中略］
> 別の図書館員がやってきた。姓の綴りがまちがっていたというのだ。それはド・ビュコワではなくデュ・ビュコワであり、デュビュコワと書かれているかもしれないので、D の文字から検索をやりなおさなくてはならないという。（*II* 10-11）

言語の違い、似て異なる題名、翻訳の揺れ、姓の違い、表記の揺れ —— 近代書誌学の知にも基づく探索は、その迂回の過程そのものの中で、言語の持つ多様性を明るみに出すことになる。「私」と書物の断絶は依然として埋まらない。

> 隣のテーブルで仕事をしていた一人の古文書学者が頭を上げて言った。「ドやデュといった小辞は、けっして貴族の証明ではなかったのですよ。そうでは

なくて、それは土地を持つブルジョワのしるしです。そのはじまりは、ラン・カルーと呼ばれた封建時代の自由地の人々です。彼らは出身地の名で区別され、ひとつの家の姓に生じる多様な語尾によって、傍系の家柄も区別できるのです。歴史上の名家の姓としては、ブシャール（モンモランシー）、ボゾン（ペリゴール）、ボーポワル（サン＝トレール）、カペー（ブルボン）があります。ドやデュの用法はきわめて不規則かつ誤用に満ちています。（*II* 11）

小辞、姓、土地の名、語尾による多様化、用法の揺れ —— 近代の知に依拠する古文書学者の口からは、さまざまな名辞や知識が際限なく繰り出される。しかしながら、それらはすべて無駄に消費されていく。なぜなら、それは探索者「私」の探求とまったくかみ合っていないからである。

とはいえ、この古文書学者の列挙は、いわば「迷える」言語を象徴するものとしてきわめて興味深い。ひとつの根からいわば枝葉のように無限に増殖し、揺れやゆがみを孕んでいく言葉、そして、言葉とそれが指し示すはずの物との断絶は、人間が使う言葉そのものが負った運命なのではないだろうか。ミシェル・フーコーは『言葉と物』において、彼自身が「言語（ランガージュ）の実在（エートル）」と呼ぶ事態の根源に、「バベルの災厄」を見出している。彼によれば、「その本源的形態において、すなわちそれが神によって人間に与えられたとき、言語は、物に類似しているがゆえに、物の絶対的に確実で透明な記号であった」が、その透明性が「人間を罰するためにバベルの塔において破壊された[6]」。つまり、フーコーによれば、「バベルの災厄」とは、言葉と物の間の原初の直接的な関係の断絶を意味し、それ以来言葉は、それ自体がひとつの「実在」となるのである。彼によれば、古典主義期に顕在化し、以来後戻りのできない形で増殖する「分類」や「百科全書的な企て」は、この「言語の実在」の延長線上に現れる現象にほかならないのである。『塩密売人たち』の「私」が遭遇する言葉の溢出と探索の阻害には、まさにフーコーが「バベルの災厄」と述べている事態、すなわち言語の「乱れ bālal」——「言語の実在」の出現を見ることができるのではないだろうか。

この書物探索の過程で開示される錯綜した言語世界は、ネルヴァルの現代性を垣間見せるものではないだろうか。彼は十九世紀半ばにしてすでに、ボルヘスの想像世界が見据えた無限の言葉の牢獄としての「バベルの図書館」（『伝奇集』）のごとき風景を見ているかのようだ。だが、一方で言語の混沌をきわめて現代的な視線で見据えながら、同時に彼は、その内奥において

[6] Michel Foucault, *Les mots et les choses, une archéologie des sciences humaines*, Gallimard, « NRF », 1966, p. 51.

きわめてロマン主義的な始原回帰の夢、あるいはのちにエリアーデが都市の建造について述べる、祖形回帰の夢[7]を追っているように思われる。

書物の探索の不可能性は、つねに、探索者「私」の疎外に繋がっていく。この書物探索の物語において「鍵」への言及があることは、無意味ではないだろう。アルスナル図書館が休館中であるのを知った「私」は、ある親切な図書館管理人がいることを思い出し、「鍵」を持っているその人物が、便宜を図ってくれるだろうと期待する。が、ひとつの挿話が記憶に立ち上る。それはその図書館のかつての管理人に関するもので、狂気じみた愛書家であった彼は、館の蔵書に執着するあまり、図書管理人の職を解かれたあとも、夜な夜な亡霊となって呼び鈴を鳴らしにくる。しかしながら、この狂える愛書家の亡霊は、けっしてふたたび図書館に入ることはないだろう。というのは、そこには、「鍵」を持った新たな図書管理人が住み、「門番」を使って扉を見張っているからである。夜な夜な空しく図書館を訪れる愛書家の亡霊の狂気は、じつは疎外された書物探索者、つまり「私」自身の狂気そのものではないだろうか。近代の図書館は、「鍵」によって閉じられている。そして、その「鍵」を持つのは、作家や詩人や愛書家ではないのである。

放浪者「私」の「宿なし状態」、あるいはそれを引き起こす「閉鎖」や「鍵」の不所持は、ネルヴァルのパリの放浪においても重要なモチーフとなっている。『散策と回想』においては、パリの地価の高騰で住居がみつからなくなったことが語り手「私」の放浪の端緒となっている。旅立ちのための馬車を逃し、夜を徹してパリを歩きまわることになった『十月の夜』の散歩者は、「門番のいない」ロンドンの夜を夢見る。また、このパリの放浪記において語り手は中央市場地区のイノサン墓地の閉鎖に言及しているが、その閉鎖は、近代におけるパリの変貌がもたらした闇の放逐＝すなわち眠りの疎外の象徴となっている[8]。墓地の閉鎖や訪問の回避のモチーフは、『オーレリア』においても繰り返され、その閉鎖のモチーフの反復により、ネルヴァルは、近代都市における詩人の夢想の断絶（＝地獄下りの不可能性）を示唆しているのである。『十月の夜』が、ディケンズ（じつはサラ）の新聞記事「街の鍵」に 着想を得たと標榜されていることは示唆的である。寝ぐらをなくした男が夜を徹してロンドンの街を歩きまわるにつれてさまざまな幻覚に襲われると

---

[7] Mircea Eliade, *Le Mythe de l'éternel retour, archétypes et répétition*, Gallimard, « NRF », 1949. とくに第１章による。

[8] このテーマについては、拙論を参照されたい。« La Mort dans la ville. L'impossible descente aux enfers dans *Les Nuits d'octobre* et *Aurélia* », *Plaisance. rivista di letteratura francese moderna e contempranea*, anno 3, n. 7, 2006, pp. 85-96.

いうこの小話を霊感の源として引きながら、ネルヴァルは、自身の夢想の「鍵」の探索の物語 —— 不可能なる探索の物語 —— を始めるのである。

ベンヤミンは、「真の蒐集家は事物を機能上の関係から引き離す」と述べている。彼によれば、蒐集家にとっては、「自身が並べるひとつひとつの蒐集物のうちに世界が現前し」ており、しかも、それらは「俗人には理解できないような驚くべき配列法」に従って秩序づけられている[9]。蒐集は「バベルの災厄」の結果としての「分類」の埒外に一つの世界を形成する。じつは、『塩密売人たち』の書物探索行においても、蒐集のモチーフは意味深い伏線となっている。「私」が件の『ド・ビュコワ神父の物語』を発見するのは、大道商人が道いっぱいに雑多な品を並べるフランクフルトのレーメル広場においてである。その書物は薄暗い店々に沿って列をなすひときわ地味な屋台で、いかにも群衆の眼を引きそうな新しい品々に紛れ込んでいる。つまりそれは、蒐集家の領分から現れるのだ。じっさいネルヴァルは、折にふれて蒐集という行為が反近代的行為であることを示唆している。観光地の訪問や緻密な予定の設定を嫌う遊歩者ネルヴァルがみずからを「蒐集家」と呼んでいることは、その一端である。また彼は、『塩密売人たち』の別の場所で、「書物の貸出制のおかげですべてが失われていくが、それには、大革命以来、文学や美術の蒐集家という人種が二度と形成されなくなったという事情もある」（*II* 52）と述べて、大衆化の時代における図書館の劣化と、蒐集の衰退とを結びつけている。

他方、『幻視者たち』の序「伯父の蔵書」には、書物蒐集家の想像力の源泉が示唆されている。ネルヴァルは、この序の冒頭で『幻視者たち』の創作を「狂気の女神の礼賛」（*II* 885）と称したうえで、「屋根裏に積み上げ、忘れ去られた」伯父の蔵書について以下のように述懐する。

> 私は田舎のある年老いた伯父のもとで育てられた。伯父には蔵書があり、その一部は旧革命の時代に集められたものだった。そのとき以来、伯父はおびただしい著作を屋根裏にしまいこんでいた。—— それらの大部分は、専制政治時代に作者の署名なしに公刊されたものや、革命期に公立図書館に収蔵されなかったものであった。〔中略〕魂が消化しきれない、もしくは不健全なこれらの食物を、私はたくさん吸収した。のちになってからも、幼い頃に刻まれたこうした印象によって判断を惑わされぬように努めねばならないほどだった。（*II* 885-886）

---

[9] Walter Benjamin, *Paris Capitale du XIXe siècle, Le Livre des passages*, Cerf, 2000, p. 224.

幼い頃伯父の家の屋根裏で見出した「不健全」で、「判断を惑わされぬように努めねばならない」書物の集積こそは、「狂気の女神の礼賛」の源である。そしてその「狂気の女神の礼賛」の想像力が、『オーレリア』の屋根裏の「バベルの塔」の「賢人を狂人とするに足る」蔵書に息づいているのである。

ところでこの序文は、ネルヴァルの想像力における歴史的観点の存在を示唆している。「旧革命の時期に集められた」伯父の蔵書は、「専制政治時代に作者の署名なしに公刊されたもの」、もしくは「革命の時代に、公共図書館には収蔵されなかったもの」とされている。つまり、伯父によって蒐集された書籍は、革命以後に生じたフランスの変化への一種のアンチテーゼの象徴として挙げられているのである。またネルヴァルは同じ序文で、「さまざまな世紀を掘り起こし」て「異端者」を探すという『幻視者たち』執筆の仕事（＝狂気の女神の礼賛）について、「精神生理学の分野に属し」、「博物学者、古文書学者、あるいは考古学者の労作にも値しうるものだ」（*II* 886）と述べて、それを近代の知を担う学問のひとつの対局に位置づけている。また、彼は、みずからの仕事は、「奇妙な構成とほころびだらけの描写」が「世俗の好事家たちの微笑みを誘うような」「古い絵画」を「修復する」(*II* 885) ことなのだとも述べている。つまり彼の意識において異端者の伝記の執筆は、散逸した品々を拾い集めたり修復したりする仕事と酷似しているのである。

では、『オーレリア』における屋根裏の「バベルの塔」はネルヴァルの放浪の中でどのように位置づけられるだろうか。ユゴーがすでに『ノートル＝ダム・ド・パリ』の「これがあれを滅ぼすだろう」の章の中で「建築物の死」について語りながらも、じつは、建築物に代わって出現した印刷物に「第二のバベルの塔」、すなわち建築物的なイメージを見ているように[10]、「建築物」としての「バベルの塔」のイメージは、十九世紀を通じて根強く残っている。ボードレールの『悪の華』の恐るべき「パリの夢」に茫洋と現れるバベルの塔、ランボーの「言葉の錬金術」において、荒野に建設される偽りの都市バビロンと最も高い「塔」、あるいは、ゾラの『パリの胃袋』のクロードの前にあらわれる異教の寺院のごとき奇怪な建築物の幻影 —— 建築物としての堅固な都市像の揺らぎを経た時代の作品においても、「バベルの塔」はときおり亡霊のように姿を現す。都市の放浪者は、失われた神話への郷愁と反撥に揺れながら、それでもなお、亡霊に挑戦しようとするがごとく、歪

[10] Victor Hugo, « Ceci tuera cela », *Notre-Dame de Paris 1482 ; Les Travailleurs de la mer*, Gallimard, « Bibl. de la Pléiade », 1975, p. 188.

み変形した神話的な塔を一瞬見るのである。ネルヴァルも、こうした神話的都市への郷愁から免れてはいない。以下は『東方旅行』の例である。

> デイール＝カマールと、険しい山に折り重なってまるでバビロンの廃墟のように並ぶ屋根の平らな家々のことは、多くの人々によってすでに描かれている。（*II* 592）

ネルヴァルは、バビロンを回想しても、ロマン派の大御所たちのように古代都市の壮大さや往時の繁栄を再現しようとしてはいないように見える。彼は、過去の都市の消失を文字通り受けとめ、現実の街の風景を淡々と拾っているように見える。彼は 1838 年に『メサジェ』紙に発表した記事において自身の東方の旅を「出会い」の「消費」と評している[11]。このことが示唆するとおり、『東方旅行』にはたしかに受動的な観察に徹したレアリスムの片鱗が認められる。それでいながら、『東方旅行』の語り手「私」は、傾斜の激しい山に沿って家々が並ぶ風景を見るたびに、きまってバビロニアを思い出す。そのイメージは、『オーレリア』のパリの放浪においても執拗に立ち現れる。

> 私は、その時いた場所から、案内人に従って、屋根屋根が集まって異様な様相をなしている高処の住宅地へと降りていった。あたかも、異なる時代の連続した層の中に足を踏み入れるがごとくだった。（*III* 706）

自分自身のこの体験を「古代都市の発掘」（*III* 706 ）のようだと語る「私」は、まぎれもなく十九世紀の首都パリを放浪しながら、そこに消失した古代都市バビロニアを探しているのである —— あたかも、夢の力でそこにふたたび戻ろうとするかのように。が、この発掘からは何も見出されないだろう。闇を放逐した街パリにおいて、夢は次第に減退する。夢想裡のバビロニア探索を繰り返すうちにしだいに見えてくるのは、近代の街パリなのだ[12]。つまり、ネルヴァルにおいてバビロニアは、喪失を認識するためにのみ想起されるのであり、近代都市の放浪とは、その喪失のたえまない確認にほかならないのである。

『東方旅行』に挿入された「暁の女王とソリマンの物語」は、異端の芸術家アドニラムが連なるカインの系譜とバビロニア、バベルの塔を結びつけてつぎのように語る。

---

[11] « A M. B… », *Le Messager*, 18 sept. 1838. (voir *I* 456)
[12] 前掲 « La Mort dans la ville » を参照されたい。

> ニムロデ［＝カインの末裔にしてアドニラムの先祖］は兄弟たちに芸術と狩りを教えてバビロニアを創設し、彼らはバベルの塔の建設を企てた。そのときから、カインの血を見抜いたアドナイは、彼を迫害するようになった。ニムロデの種族はふたたび離散することになった。（*II* 727）

この東方の夢は、疎外された芸術家の運命を入れ子の中に凝縮させた形で見せている。アドニラムという異端の芸術家が近代における詩人、すなわちネルヴァルを象徴する存在であってみれば、その祖先が試み、全能の神アドナイによって中断させられたバベルの塔の建造とは、ネルヴァルの想像世界においては、詩の創造の象徴にほかならないだろう。そしてカインの末裔（すなわち詩人）が強いられる放浪は、バベルの塔の喪失に端を発していると考えられているのである。図書館の焼失と閉鎖、墳墓の消失と閉鎖、家の喪失、鍵の喪失 —— 反復される喪失と拒絶は、近代における詩人の住処の喪失を語るモチーフにほかならない。放浪の詩人は、パリあるいは東方の諸都市の放浪を繰り返しながら、幻のバビロニアへの郷愁にとらわれるのである。放浪者ネルヴァルがみずからを「考古学者」と称するのは、彼の放浪が失われた都市バビロンを見出すための、象徴的な時間の遡行の旅であるからにほかならない。

このように考えれば、『オーレリア』の屋根裏の「バベルの塔」がいかに特権的な空間であるかが理解できる。闇と眠りを疎外する不夜城パリにおいて、ここは、唯一「私」が夢に沈潜できる隠れ家である。じっさい、『オーレリア』において「私」が本来の睡眠を得るのはこの場所のみだ。「私」が屋根裏の蒐集品を「ファウスト博士のところに雑然と積まれたがらくたを思わせるような」（*III* 742）と評していたことを思い出そう。ファウストの遍歴は、「埃をかぶったままで積んである虫食いだらけの本」や「先祖から伝わったガラス類、箱、道具類、朽ち果てた家具」が雑然と並べられた「牢獄」から始まる[13]。屋根裏に集められた蒐集品 —— 近代における詩人の疎外の象徴としての「分類」を免れた品々は、いわば「私」にとって夢への飛翔の入り口である。ベンヤミンの言葉を借りれば、「蒐集家は、深奥において、夢の生の一つの挿話を生きる[14]」のだ。

屋根裏の「バベルの塔」は、都市の放浪で禁じられた深さと垂直運動の夢想を生み出す。

---

[13] Gœthe, *Faust*, traduit par G. de Nerval, Garnier-Flammarion, 1964, p. 48.
[14] W. Benjamin, *op. cit.* p. 223

私はある塔にいた。それは地のほうにはきわめて深く、天のほうにはきわめて高く伸びていて、これを上り下りすることに全生涯が費やされてしまうにちがいないと思われた。（*III* 745）

この夢想の中で、「私」は、都市の放浪ではけっして実現できなかった上昇と下降の二つの夢を同時に叶えるのである。上昇の夢とはすなわち、「無垢な人々や単純な人々が心の中に完璧な形で思い描くことのできる神秘な殿堂を再建すること」（*III* 723）すなわち、アドナイによって中断された「バベルの塔」（Bāb-ili　天の門）を再建し、天に届くように伸ばすことである。下降の夢とはすなわち、ダンテのひそみに倣った夢への沈潜と歴史の遡行である。「失われた文字を、消え去った印を見出そう。不響な諧調を立て直そう」（*III* 725）―― つまり、ここで「私」が夢見るのは、深さの夢想を経て、運命的な「災厄」以前の言葉と物の原初の状態に辿りつくこと、そしてそれを通じて 詩（ポエジー） を再生させることなのである。『オーレリア』末尾における女神の出現と試練の満了の告知、高処に咲く一輪の花が開示する世界の事物の交感の夢は、まさに、一瞬垣間見られた始原の風景なのであろう。

とはいえ、幸福な夢想を誘うこの「バベルの塔」が精神病院の監禁室にあるというきわめて逆説的な事実を思い起こさねばならない。この特権的な休息の場は、詩人を「狂人」として「分類」し、「隔離」する「牢獄」の内部にしか存在しえないのだ。しかも、ここでも「私」に真の解放はない。というのも、この「塔」においても、じつは完璧な眠りは得られないからである。「私」が屋根裏に集めた蒐集品には、『シルヴィ』、『粋な放浪生活』においても言及され、「私」の夢を誘う装置となっていた十八世紀の「天蓋付きの寝台」が含まれている。しかしながらその寝台について「私」は、「地模様のある赤い絹布が掛けられていたが、その天蓋は立てることができなかった」（*III* 742）と語る。つまり、寝台を完全な形で据えつけることができなかったとほのめかしているのである。「メモラビリア」において女神の顕現に立ちあった甘美な夢想のあとで、「私」はふたたびヨーロッパとおぼしきある街に立つことになる。「私」は今後も同じ情景の反復を夢の劣化のうちに生きることになるだろう。原初の詩のあり場所＝バベルの塔への激しいまでの郷愁が彼を解放することはないだろう。その執拗な夢に惹かれ、かつその瓦解の相を踏みしめながら、放浪者ネルヴァルは歩むのである。